

と www.tenpla.net プラネタリウム

今月のお題
.....

見えない宇宙を見る

天体画像や宇宙シミュレータってとっても便利だからこそ、注意して使った方がいいよね、って話です。

同じように、宇宙シミュレータで太陽系の姿を描き出しているところを想像してみてください。太陽を中心に、水星、金星、地球、火星……と並んでいる、おなじみの画です。あれは、いったい誰の視点からの画なのでしょう。これまでに誰もそこから太陽系を見た人はいませんか、きっとこれからも、誰も見ることはできないでしょう。あれはあくまでも、生身の人間には到達し得ない、科学の眼からの画なのです。

そんなことは百も承知という人は別にいいのですが、私が思うに、私たちの多くはふだんそれを意識せずにいます。これは、お話を聞く側だけでなく、する側も一緒です。そういった素材や道具を使うのであれば、それらが備え持つ暴力性も意識すべきです。なぜなら、これらの素材や道具はわざわざ優れているからこそ、圧倒的な説得力で私たちに迫ってくるからです。これが宇宙の姿なんですと言われたら、なんら疑うことなくすんなり受け入れてしまいそうです。そうなってしまうと、自分なりの想像力を働かせる余地がなくなってしまいます。これは、科学的な態度とは言えません。少なくとも自分が感じている科学の面白さはまったく違います。

もちろん、だからといって美しい天体画像や分かりやすい宇宙シミュレータなどを使わないのはもったいない話です。大事なのは、使い方を誤らないことでしょう。映画が文学的な想像力を奪い去ったわけではなく、そこから新たな芸術世界を生み出したように、天体画像や宇宙シミュレータを意識して使うことで天文学と人々のより豊かな関係を生み出すことができるはず。そのことを忘れないためにも、たまに映像資料を一切使わないイベントを試みることも有意義だと思います。ぜひ皆さんもいかが？

先日、ちょっと変わった親子向けのイベントをしてきました。宇宙の話をして、参加者に絵を描いてもらうというイベントです。ユニークだったのではないと思うのは、一切、映像資料を使わないでお話をしたこと。私が宇宙の話をお話だけでそらんじ、参加者たちはそれを聞きながら想像した宇宙の絵を描いてもらいました。お話しは地球を出発するところから始まり、月に少し立ち寄って、そこからは太陽系の中を探検し、さらには星々の世界に飛び出して、最後は銀河系全体が見えるところまで。できるだけイメージが湧きやすいよう、姿形や特徴についての説明を中心に行いました。想像しづらいことや、説明が不十分などところについては質問をもらい、一方的に話すだけにならないように注意しました。子どもだけでなく、付き添いの親御さんやスタッフも一緒になってみなでお絵かきをしたのですが、同じ話を聞いていても、それぞれが描いた絵はまったく違います。最後には描いた絵を互いに見せ合って、みんながどんな宇宙の姿を想像したのかを共有して終わりました。ふだん、講演会などでお話をしていると、自分の話がどのように理解されたのかを知る機会はほとんどないのですが、このイベントではそれが露わに見えるので、私にとっても刺激的の多いイベントでした。

でも、なぜこのような変わったイベントをしようと思ったのかというと、それは視覚情報に頼りすぎていることへの反省があったからです。美しい天体画像や優れた宇宙シミュレータの存在は、天文学の普及の上で非常に大きな力になっていることは間違いありません。私たちもふだんの活動ではそれらの素材や道具を使っています。宇宙の話をするのにたいへん便利なので、あまり深く考えずにかんがんと。これが危うい、と思ったのです。

例えば美しい星雲の画像を想像してみてください。ジェームズウェッブ宇宙望遠鏡が今年になって公開した、わし星雲の画像なんていいですね。しかし、これはあくまでも観測装置を通して捉えた宇宙の姿に過ぎません。私たちが仮にこの星雲の近くまで行けたとしても、同じようには見えないでしょう。私たちの肉眼は電子デバイスのように光を貯めることもできなければ、赤外線や電波など可視光以外の波長の電磁波を見ることもできません。天体画像はあくまでも観測装置が捉えた宇宙の姿です。



三鷹市星と森と絵本の家で行われたワークショップの様子